

『#恐るべき緑』（ベンハミン・ラバトウツ著）を読んでみた。著者はチリのサンティアゴに在住。2013年度サンティアゴ市文学賞を受賞。本書は英語版が2021年度国際ブッカー賞最終候補作および全米図書賞（翻訳部門）最終候補作に選ばれ、「ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー」誌の2021年度「今年の10冊」に選出される。

タイトルの『恐るべき緑』とは、ある読者は大量破壊兵器「塩素ガス」の緑色のことで、さらに、この緑色は「植物」の緑色とも重なると省察している。

本書は20世紀科学界の巨人たちの評伝とも言えるが、フィクション部分も多いという。5編の短編から構成されている。数学に取りつかれた人間の狂気とその行動を描き出している。これは評伝なのかフィクションなのか（一般人にはどこまでが事実でどこからがフィクションかが見分けられない）。トランプの言説を信じるか、ファイクと片付けるか。数学に取りつかれた人間の次の行動が予測できない。狂人化するとそんな行動をとるのかと納得しようとするが、それが著者の創ったフィクションなのかが区別がつかない。緊張を孕みながらページを捲ることになる。「科学のなかに詩を見出し、宇宙の背後にある論理や数式が、天才たちの前に自ずと姿を現わすかのような比喻が随所に光る」という感想もある。既存のジャンルを軽々と飛び越える国際的な話題作である。

#### 『プルシアン・ブルー』

これは、1782年に発明された合成顔料のこと。本編は毒ガスと青酸カリの話。こんな恐ろしいモノを作ったドイツのフリッツ・ハーバー(Fritz Haber)はノーベル賞（1918年のノーベル化学賞）を受賞しているのだ。これら毒物を開発する前に、彼は「元素からのアンモニア合成法の開発」をした。窒素と水素からアンモニアを化学合成するというこの手法はハーバー・ボッシュ法と呼ばれる。「空気からパンを作る」と表現され、世界の爆発的な人口増に大きな貢献をした。一方で、「空気から窒素を抽出する自らの方法が地球の自然の均衡をあまりに大きく狂わせてしまった結果、この世界の未来は人類ではなく植物のものになるのではないか」と著者は批判もする。その後、1914年に第一次世界大戦が勃発すると、従軍を却下されたハーバーは紆余曲折の毒ガス開発に進むことになる。毒ガス開発をした批判に対しハーバーは「毒ガスを最初に使用したのはフランス軍であり、毒ガスを使って戦争を早く終わらせることは、多

くの人命を救うことに繋がる」と述べた（ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下と同じ理屈）。

#### 『シュヴァルツシルトの特異点』

科学史上初めてブラックホールの存在を示唆した天文学者シュヴァルツシルトの知られざる人生。誰も理解できない知見と紙一重の異常な精神世界が描かれている。

『核心中の核心』不世出の数学者グロタンディークの数奇な生涯（誰も理解できない数千ページの論文）と、日本人数学者の京都大学教授望月新一の人生が交錯する（彼はグロタンディークの論文を読破した数少ない一人）。多くの奇行が書かれている。幼少時期から普通では計り知れない人物だったのだ。

#### 『私たちが世界を理解しなくなったとき』

黎明期の量子力学の発展に寄与した三人の理論物理学者、ハイゼンベルク、ド・ブロイ、シュレーディンガーが登場する。ミクロの世界では、電子などの素粒子はその位置と運動量の両方を同時に正確に計測することができないという原理。観察者がどちらであるかを定める。それぞれが狂気を発散させながら啓示の瞬間を待っている。

#### 『エピローグ 夜の庭師』

作者の思索を綴る。

これは評伝でも小説でもない。過去に遡って知の巨人を主人公にした SF 小説のようだ。読み始めると止まらない（私は、SF 小説はすぐ飽きてしまうのだが・・・）。